

来年一月に創立五十周年をお迎えになられる由、謹んで慶賀申し上げます。

東洋哲学研究所が、研究・出版、講演会、セミナー、展示会、シンポジウムなど、国内・海外に渡って幅広い学術活動・思想運動を展開されて今日に至ったことに敬意を表します。

もちろん、東洋哲学研究所の場合、その研究活動・

法華経を根底に現代的課題を扱う

社会活動の礎石となっているものは、法華経を核とする大乘仏教ですが、とって単純な宣揚に拘泥したり、いわゆる「縮み志向型」の自己防衛に墮することなく、宗教をめぐるあらゆる問題を、特に現代的視点を中心に置きながら展開されてきた姿勢に、賛意を表するものです。

とりわけて物理学や生物学に顕著ですが、二十世紀

は、それまでの人間の知的営みとその成果としての文明とを画する時代として、「パラダイムの転回」の世紀などと論じられてきました。宗教の問題を科学文明と同一視することは当然できませんが、人間の営みを全体的論的にとらえれば、宗教だけは昔のまままで社会的文化的関連を持続するなどとは到底考えられません。「第二の軸の時代」の到来ともいわれる由縁です。

赤池憲昭

最新号第五
十卷第一号
二〇一一年五
月)まで、通

卷百六十六号

(除別冊)を重ねられた『東洋学術研究』は、研究所の諸活動を代表する機関誌であると理解しています。いまこの機関誌を通じて研究所としての業績を瞥見するために、各号の「特集」のテーマの若干に注目してみたいと思います。

前半では特に東洋各文化の特質(二十卷)が、東西文化の交流(十卷)へと転回する経緯を尋ねて、研究の基



本姿勢を明らかにした後、通巻第百号からは科学的宗教研究・世俗社会と宗教・宗教の社会的役割・生命科学や医学からの生と死の問題などなど宗教を囲む現代的課題の数々を取り扱っています。法華経の思想を真芯に据えながら、しかも宗教世界の隅々に目配りし、二十一世紀を船出して行く「東洋哲学研究所」の更なる御健闘を祈念申し上げます。

（あかいけ のりあき／愛知学院大学名誉教授）

創価学会から委託され東洋哲学研究所が編集している「法華経写本シリーズ」。現在までに旅順博物館所蔵梵文法華経断簡、ネパール国立公文書館、ケンブリッジ大学図書館、東京大学総合図書館、英国・アイルランド王立アジア協会、パリ・アジア協会、大英図書館、ケンブリッジ大学図書館がそれぞれ所蔵する梵文法華経写本、カーダリク出土梵文法華経断簡、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵の西夏文法華経——これらをローマ字版や写真版で計13冊刊行している